公開鼎談

長瀬海×荒木駿×須藤輝彦
この世界の想像力　海外文学のススメ〈アジア篇、中欧篇〉

1月22日、「この世界の想像力」と題し、書評家の長瀬海さん、〈アジア文芸ライブラリー〉を立ち上げた編集者の荒木駿さん、中欧文学者の須藤輝彦さんにご登壇いただき、アジア文学、中欧文学の現在とアジアと中欧から考える世界文学について公開鼎談を開催した（司会は長瀬海さん）。その一部を抄録する。（編集部）

アジアと中欧をつなぐキーワード〈中位のコンテクスト〉

――イベントの冒頭、アジアと中欧をつなぐキーワードとして取り上げられたのは、須藤輝彦さんの『たまたま、この世界に生まれて』の中から取り出されたミラン・クンデラの〈中位のコンテクスト〉という概念。この〈中位のコンテクスト〉を手がかりに、「世界の想像力」をめぐって議論が展開された。

長瀬　「世界の想像力」ということを考えるにあたって、本書の中の〈中位のコンテクスト〉という概念が非常に重要だと思いました。中央ヨーロッパ、ボヘミアを自分の中で切っても切り離せないものとして考えていたミラン・クンデラにとって、自分の磁場としてのアジアと中欧という視座があった。

須藤　僕の感覚では、九鬼とかヤスパースといった実存主義者と呼ばれる人たちは、運命を考える際に必然性に重きを置きすぎている。彼らは偶然が必然化したものが運命だと言い、しかもそれを積極的に引き受けることに価値を見出そうとするんですね。だけどそれでは運命という観念の広がりやダイナミズムは捉えきれない。だから本書では、偶然性と必然性の間の緊張関係、それらの間の絶え間ない振幅そのものが運命だという言い方をしています。

長瀬　僕はトルコの作家オルハン・パムクとクンデラは近いと感じます。パムクはヨーロッパとアジアの両方に足場を置いて運命について考えてきたとも言えます。例えば『赤い髪の女』（宮下遼訳、早川書房）は主人公が父の不在を抱えながら生きる物語で、西洋のオイディプス悲劇と東洋のロスタム・コンプレックスを下敷きにしている。イスラム社会では実存的な自由が希薄であり、それゆえに運命が文学的な主題となりやすいのではないか。須藤さんの論考は僕に運命がアジア文学の基調になっていることを教えてくれました。チベット文学のツェリン・ヤンキー『花と夢』も業がテーマでしたね。

荒木　チベットの小説家ツェリン・ヤンキーの『花と夢』では、主人公の女性たちが悲しい境遇に追いやられているのに、自分たちがこうなったのは自分の業が深いせい、つまり前世の行いが現在につながっているという捉え方をしているわけです。この小説で日本の読者が一番違和感を覚えるところがここだと思います。日本のフェミニズムの文脈で読むと、彼女たちが虐げられているのは男性優位の社会とか女性を性的に搾取する構造にあるのにも関わらず、彼女たちが自分を責めているようにも読めてしまう。やっぱり日本とチベットって考え方が違うんだな、という読み方もできるんですけど、日本もちょっと振り返ってみると、仏教の伝統があり、例えば日本の仏教界では、部落差別を業の思想が強化してきたと長らく言われてきました。そういった歴史が日本にもあったわけで、決して遠い国の話ではない。

この小説では、4人の女性たちが自分の力では変革しようのない世界を生きている中でそれを引き受けつつ、受け入れて前に進む姿が描かれます。その中で生きていく手がかりとして、業であるとか、信仰、言葉の力というものをこの小説は描いているのではないかと思います。

運命と業

――次に同書から取り出されたテーマは「運命」。この運命という言葉から中欧文学とアジア文学を続ける試みがなされた。

長瀬　クンデラの代表作である『存在の耐えられない軽さ』を須藤さんは本書で「偶然性と運命」という概念を用いて読み解いています。偶然性というのは必然性と反対の概念なんだけれど、運命を捉え直すときには偶然性と必然性をその中間で捉えなければいけない。ここで須藤さんは九鬼周造の考え方を引用していて、《つまり偶然性は、ある決定的な瞬間にその極限において必然性と「異種結合」し、内面化されることで、運命と呼ばれるものへと変容しうる。》（224頁）と言っていますね。

須藤　僕の感覚では、九鬼とかヤスパースといった実存主義者と呼ばれる人たちは、運命を考える際に必然性に重きを置きすぎている。彼らは偶然が必然化したものが運命だと言い、しかもそれを積極的に引き受けることに価値を見出そうとするんですね。だけどそれでは運命という観念の広がりやダイナミズムは捉えきれない。だから本書では、偶然性と必然性の間の緊張関係、それらの間の絶え間ない振幅そのものが運命だという言い方をしています。

長瀬　僕はトルコの作家オルハン・パムクとクンデラは近いと感じます。パムクはヨーロッパとアジアの両方に足場を置いて運命について考えてきたとも言えます。例えば『赤い髪の女』（宮下遼訳、早川書房）は主人公が父の不在を抱えながら生きる物語で、西洋のオイディプス悲劇と東洋のロスタム・コンプレックスを下敷きにしている。イスラム社会では実存的な自由が希薄であり、それゆえに運命が文学的な主題となりやすいのではないか。須藤さんの論考は僕に運命がアジア文学の基調になっていることを教えてくれました。チベット文学のツェリン・ヤンキー『花と夢』も業がテーマでしたね。

荒木　チベットの小説家ツェリン・ヤンキーの『花と夢』では、主人公の女性たちが悲しい境遇に追いやられているのに、自分たちがこうなったのは自分の業が深いせい、つまり前世の行いが現在につながっているという捉え方をしているわけです。この小説で日本の読者が一番違和感を覚えるところがここだと思います。日本のフェミニズムの文脈で読むと、彼女たちが虐げられているのは男性優位の社会とか女性を性的に搾取する構造にあるのにも関わらず、彼女たちが自分を責めているようにも読めてしまう。やっぱり日本とチベットって考え方が違うんだな、という読み方もできるんですけど、日本もちょっと振り返ってみると、仏教の伝統があり、例えば日本の仏教界では、部落差別を業の思想が強化してきたと長らく言われてきました。そういった歴史が日本にもあったわけで、決して遠い国の話ではない。

この小説では、4人の女性たちが自分の力では変革しようのない世界を生きている中でそれを引き受けつつ、受け入れて前に進む姿が描かれます。その中で生きていく手がかりとして、業であるとか、信仰、言葉の力というものをこの小説は描いているのではないかと思います。

アジア文芸ライブラリー／「今ここ」のアジア文学

長瀬　中欧文学とアジア文学を並べながら世界文学を考えてみたときに、「歴史の終わり」が主題となりうる中欧文学に対して、アジア文学は強烈に「今ここ」の感覚がある文学なんだと思っています。まだ自分の中の歴史が終わっていないという感覚は韓国に限らずあって、ウティット・ヘーマムーン『プラータナー』（福冨渉訳、河出書房新社）というタイ文学も激動のタイ現代史を通じて自分のセクシャリティを捉え直すことを独特の文体で描いています。荒木さんはその点どう思いますか。

荒木　本当におっしゃる通りだと思います。最初にお話ししましたが、アジア各国では90年代くらいまでは独裁政権が続いていて、それから30年くらい経った今、また権威主義的な国家体制に回帰する動きが実際にタイやミャンマーでもあります。そうでなかったとしても、そのときの歴史が未解決のものとしてまだ残っている。90年代以降に生まれた人たちが大人になって世の中に出てくるようになった今、その歴史をどう引き受け、伝えていくのかということを、おそらく60年代から70年代に生まれた作家たちが役目として担っているのかなとも思っています。例えばインドネシアの『美は傷』は、エカ・クルニアワンという75年生まれの作家が書いたのですが、彼は20代でスハルト政権の崩壊を目撃し、なぜ自国の歴史がこれだけ暴力にまみれていて、スハルトのような愚かな独裁者を生んでしまったのかという問いに動かされて書いたと言っています。アジアでは民主主義が必ずしも安定的に機能しない現代社会を目にして、自分たちが未解決の歴史の中に生きているという感覚が強くあるのかなと思います。

荒木　駿氏

長瀬　『美は傷』という小説はマジックリアリズム的な手法で書かれた作品で、南米のラテンアメリカ文学から影響を受けている作品です。ジャワ南部の港町を舞台に、植民地統治や日本占領下の歴史というものをマジックリアリズム的に捉え直している。『美は傷』だけじゃなく中国文学にもラテンアメリカ文学から影響を多く受けた作品は多いですね。中国の闇連科の小説はほぼマジックリアリズムで書かれていますし。そもそもガルシア＝マルケスにはコロンビアの歴史というものを捉え直すときにマジックリアリズム的な手法じゃないと、自らの歴史の暗部に潜り込めないという感覚があった。その感じは多くのアジアの作家が持っているものでもあるんだと思います。

荒木　寓話的あるいはこの世的ではないものを使って語るという手法ですね。文学というのはある種の西洋近代の産物で、それを輸入してアジアや中南米の作家たちは書いている一方で、アジアにもおそらく中南米にもそれ以前から「文学」概念には包含されない、口承文芸や芸能の範疇に含まれるようなものがあります。インドネシアの場合は、ワヤンという人形を使った影絵芝居がありますが、そういった土着の歴史性がアジアの文学から見て取れることがあります。

長瀬　須藤さんは『ユリイカ』2025年1月号のハン・ガン特集に寄稿されていましたが、中欧文学、アジア文学の歴史観をどのように受け止めているでしょうか。

須藤　中欧の作家にもアジアの作家にも、大きく言えば20世紀への反省という構えがある気がします。自分たちとその歴史との関係をどう考えるか。興味深いのは、血に塗れた歴史としての20世紀に向き合う中で、クンデラもハン・ガンも、結局は「人類の歴史」への反省というところにまで行き着くことです。クンデラの場合はこれがそのまま反出生主義的なものにつながる。ハン・ガンは作品や読み方によっても違うと思いますが、それとトランスボーダー的な動きにも注目しています。ご紹介したいのはジェニー・ザンの『サワー：ハート』（小澤身和子訳、河出書房新社）という作品です。上海生まれの作家による極貧青春小説で、ものすごく貧乏で支配的な両親の元に、その上精神的にも社会的にも不安定な状況で中国系アメリカ人として生きる経験を、皮肉で独特な視点から見ています。訳者の小澤さんによればアジア系のアメリカ文学は、外国語の影響を受けた独特の英語が散見されることもあり、それを翻訳に生かすのが難しくて面白くもあるとおっしゃっていて、翻訳という観点からも注目しています。

長瀬　お二人の知見を一緒に結びつけるとこんな豊かな世界文学論ができるんだということを僕は改めて感じました。今日お話しいただいたことは引き続き考えていきたいなと思います。

（おわり）

★ながせ・かい＝書評家・ライター。
★あらき・しゅん＝編集者。
★すどう・てるひこ＝中欧文学者。著書に『たまたまま、この世界に生まれて　ミラン・クンデラと運命』。

長瀬　海氏

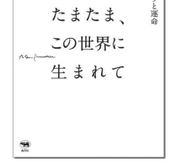
須藤　輝彦氏

中欧文学とアジア文学の現在

――鼎談の終盤は、須藤さんと荒木さんのお二人から中欧文学とアジア文学の動向と潮流を伺った。

須藤　中欧とアジアの現代文学の共通項として、女性作家の台頭は確かにあると思います。中欧の中でもチェコは女性的な観点からチェコの歴史を捉え返そうとするカテジナ・トゥチュコヴァーという女性作家もいます。僕が共訳した『シブヤで目覚めて』（阿部賢一共訳、河出書房新社）の著者アンナ・ツィマの最新作は日本が舞台で日本人を主人公とした話だけですが、それ以降は旅行や移住もしやすくなって、単純に言えば小説の舞台が広がり、脱国家的なアプローチも増えた。それと歴史の見直しという動きは強くあって、邦訳も近々出版されると思いますが、フェミニズム的な観点からチェコの歴史を捉え返そうとするカテジナ・トゥチュコヴァーという女性作家もいます。僕が共訳した『シブヤで目覚めて』（阿部賢一共訳、河出書房新社）の著者アンナ・ツィマの最新作は日本が舞台で日本人を主人公とした話だから、本当に越境的ですね。彼女の場合はチェコとかヨーロッパはあまり関係なく、直接日本の文学からの影響を受けている。そういった意味でも世界文学的なムーブメントはあると思います。僕が今一番翻訳したいのは、ヤン・スカーツェルというクンデラにも影響を与えた戦後チェコを代表する詩人です。それとマレク・シンデルカという若手の作家で、僕は彼の文体がすごく好きなんです。

荒木　アジアのフェミニズムって一般的に想像されるフェミニズムとは結構違うような気がしています。『花と夢』も違和感を覚えるところが多いと思うのですが、でもやはりチベットの文脈の中で生まれてきた女性の言葉がどういう意味を持っているのか、ちゃんと一回引き受けないといけないことだと思っています。今の私たちのフェミニズムは多くを西洋から輸入された言葉に頼っていますが、それとは違う土壌の中で生まれてきたフェミニズムがどういうものなのか、正面から向き合わないといけない問題だなと思っています。



▼海外文学のススメ‖　紙面で掲載できなかった作品もご紹介▼

◇春秋社〈アジア文芸ライブラリー〉
『花と夢』（ツェリン・ヤンキー著、星泉訳）
『南光』（朱和之著、中村加代子訳）
『わたしたちが起こした嵐』（ヴァネッサ・チャン著、品川亮訳）
『高雄港の娘』（陳柔縉著、田中美帆訳）
『美は傷』（エカ・クルニアワン著、太田りべか訳）

＊

アルンダティ・ロイ『小さきものたちの神』（工藤惺文訳、ディーエイチシー）
アルンダティ・ロイ『至上の幸福をつかさどる家（仮）』（2025年〈アジア文芸ライブラリー〉より刊行予定）
アダニーヤ・シブリー『とるに足りない細部』（山本薫訳、河出書房新社）
ラッタウット・ラープチャルーンサップ『観光』（古屋美登里訳、早川書房）
林育徳著『リングサイド』（三浦裕子訳、小学館）
リン・ディン『アメリカ死にかけ物語』（小澤身和子訳、河出書房新社）
ネイサン・スロール『アーベド・サラーマの人生のある一日　パレスチナの物語』（宇丹貴代実訳、筑摩書房）
モアメド・ムブガル・サール『人類の深奥に秘められた記憶』（野崎歓訳、集英社）
クラスナホルカイ・ラースロー『北は山、南は湖、西は道、東は川』（早稲田みか訳、松籟社）
『文藝』2024年秋季号「特集1 世界文学は忘却に抵抗する」

●長瀬海×荒木駿×須藤輝彦「この世界の想像力―海外文学のススメ（アジア篇、中欧篇）」公開鼎談のアーカイブ視聴（有料）はこちらから！

出版社一覧　かんき出版　☎03-3262-8015／関西学院大学出版会　☎0798-53-7002／北烏山編集室　☎03-5313-8066／教育評論社　☎03-3241-3485／国書刊行会　☎03-5970-7421／ことばのたび社　☎050-3126-2746／子ども時代　☎048-278-9091／春秋社　☎03-3255-9611

海外文学・研究書特集

韓国
カクテル、ラブ、ゾンビ

四六判・192頁・1760円
チョ・イェウン著、カン・バンファ訳
韓国で10万部を突破した没入感120%短編集。表題作からドラマ化されたデビュー作まで、社会問題を背景に愛と切なさが共存する新感覚ホラー。
かんき出版

フランス
カルトゥジオ会修道院の門番であるドン・B＊＊＊の物語

四六判・328頁・4400円
ジェルヴェーズ・ド・ラトゥシュ著、関谷一彦訳　18世紀で最も猥褻なリベルタン文学。その多くが禁書のため、地下で取引され密かに読まれていたベストセラーが初邦訳！
関西学院大学出版会

その他西欧
リーディング・リスト

A5変型判・336頁・3080円
レスリー・シモタカハラ著、加藤洋子訳　日系カナダ人4世の著者による自伝小説。ウォートン、ジョイス、ナボコフなど世界文学の名作13編が崖っぷちのレスリーの人生に光を投げかける。
北烏山編集室

ドイツ
ブリュンヒルデ　伝説の系譜

四六判・256頁・3520円
石川栄作著　ワーグナーの楽劇『ニーベルングの指輪』で知られるブリュンヒルデとは何者か。古代ゲルマンから北欧の伝承、中世英雄叙事詩、現代に至るまで、その像の変遷を辿る。
教育評論社

その他西欧
《オーストリア綺想小説コレクション　1》
廃墟建築家

四六変型判・467頁・4620円
H・ローゼンドルファー著、垂野創一郎訳　廃墟建築家の設計した巨大地下シェルターに誘いこまれた語り手が夢みる不思議な物語。オーストリア・バロックの粋をこらした魔術的遠近法。
国書刊行会

イタリア　アメリカ
ぼくがエイリアンだったころ

A6文庫判・350頁・1980円
トンマーゾ・ピンチョ著、二宮大輔訳
9歳で眠ることをやめた青年ホーマーは、ある夜、ミュージシャンのカートに出会いドラッグに溺れてゆく。イタリアポストモダン文学の奇才トンマーゾ・ピンチョの代表作。訳・二宮大輔
ことばのたび社

その他アジア
美は傷

四六判・544頁・4400円
エカ・クルニアワン著、太田りべか訳
インドネシアの植民地統治、日本軍による占領、独立、政変と弾圧といった暴力の歴史を軸に、伝説と神話が渦巻くマジックリアリズム小説の傑作。
春秋社

その他アジア
高雄港の娘

四六判・360頁・2750円
陳　柔縉著、田中美帆訳　日本統治下の台湾に生まれ、戦後は日本に渡って台湾独立運動に奔走する夫を支えつつ自らも経営者として活躍した女性を描く、台湾の現代史を問い直す歴史小説。
春秋社

その他アジア
わたしたちが起こした嵐

四六判・440頁・2970円
ヴァネッサ・チャン著、品川 亮訳
日本占領下のマラヤで、日本軍のスパイに協力した主婦セシリーと、その家族に起こった数々の悲劇をスリリングに描く、衝撃のデビュー作。
春秋社

その他アジア
南光

四六判・392頁・2860円
朱 和之著、中村加代子訳　日本統治時代の台湾に生まれ、東京のモダンガールや、戦争と動乱で大きく変わりゆく台湾の近代を撮影しつづけた写真家、鄧南光の生涯。
春秋社

その他アジア
花と夢

四六判・308頁・2640円
ツェリン・ヤンキー著、星 泉訳　ラサのナイトクラブで働きながら身を寄せ合って生きる4人の女性たちの生き方と悲痛な運命を、慈悲に満ちた筆致で描く。第61回日本翻訳文化賞受賞。
春秋社

その他西欧
ブリクセン／ディネセンについての小さな本

四六判・272頁・2200円
『アフリカの日々』『冬の物語』『七つのゴシック物語』等に何が描かれていたか？　女性運動やフェミニズムに対しどんな立ち位置にあったのか？　ギーオウ・ブランデス賞受賞作。
子ども時代